

野呂進先生との思い出

専修大学スポーツ研究所顧問
佐藤 雅幸

「出会いは人生を決める」

私には人生の師匠というべき二人の青森県人がある。ひとり目は、仙台大学テニス部の先輩、越善隆先生(青森東高校教諭)。ふたり目は、専修大学での上司、野呂進先生である。越善先輩は、むつ市出身の南部衆。南部衆は我が道を行くタイプで周囲を気にしないが、津軽衆の野呂先生は周囲の状況をしっかり掌握し上手に対応する。両者に共通する、寡黙さ、辛抱強さ、意地っ張りそして独特のユーモアのセンスは、青森の文化・風土が育んだのだろう。

『私は“野呂”と言います。陸上競技の指導をしています。趣味はゴルフを少々。陸上競技の指導者なのに“ノロ”という苗字です。(笑)しかし、名前は“進(ススム)”ですから前進します。(大爆笑)宜しくお願いします。』津軽弁訛りの挨拶は、野呂先生の鉄板ネタで、参加者の心はワシ掴みにされる。

この話を、越善先輩にしたところ、「これが青森県人のセンスだよ。名前をつけた御両親とそれを見事に解釈する野呂先生は青森県人として尊敬するね。パソコンだって今やアップルだろう!青森県人は何百年前からアップルに眼をつけているのだから・AKBだって青森交通バスが先だからね・そうそう、ピコ太郎=小坂大魔王は、青森東高校の出身なの知っているか?3年前に居酒屋で飯を食わたしたからな・・・」:典型的な南部衆の話し。

「専修大学教員人事」

私事、専修大学に教員として勤務して33年が過ぎようとしている。申年から酉年に禊が渡り、今年も箱根駅伝のスタートと同じ日に、満61歳の誕生日を迎えた。島村俊治は、「人の運命は出会いで決まる。成功するか、失敗するかは、その出会いをどれだけ大事に出来るかであろう」と述べているが、歳を重ねるほど心に響く言葉となっている。

日本体育大学大学院助手の任期満了を迎えた夏、教員室の掲示板をふと見ると「専修大学 体育実技教員2名募集」の文字が飛び込んできた。水泳、球技(テニス、バスケット、バレー、バドミントンなど)担当可能な人物と記載されていた。早速、当時学部長であった恩師の長田一臣先生と体育心理研究室の西條修光講師(当時)に相談すると、「確か専修大学には、野呂君が駅伝の指導者として勤務されているはずだ・・・野呂君はね、箱根駅伝やアジア大会で大活躍した人物で、日が暮れるまで黙々と練習する学生だったな・・・」と話していた事を思い出す。その年(1983年)、東京オリンピック100m決勝のスターターを務め「よーいドン スターター30年」(1966年報知新聞社)の著者、佐々木吉蔵先生(日本体育大学名誉教授)が逝去され、お通夜の席で長田、野呂両先生が再会することになる。心理学では、意味のある偶然が重なりあうことをシンクロニシティ:synchronicityというが、今振り

返してみると、この出来事が専修大学とは縁も所縁(ゆかり)もなかった私の専修大学教員人生のスタート(よーいドン)となり、私の人生を決めた瞬間となったのである。

「責任は俺がとる!」

野呂先生と初めてお会いしたのは、1984年4月、保健体育系列会(現在の保健体育部会)であった。お話ししたい事が山程あったのだが、当時の保健体育系列・社会体育研究所は、大学体育教育とスポーツ研究の新たなシステムを構築する過渡期でもあり、新人の私にとっては、諸般の事情で隣の野呂先生の研究室を訪ねて行く事が出来なかった。野呂先生においては、専修大学駅伝部とは距離を置いた時であり、精神的にも苦しい時期だったと推察する。

数年後、野呂先生が駅伝部の監督として復帰し、駅伝部の心理サポートを藤江学先生(東京工業大学名誉教授)と共に担当する事になる。駅伝選手の性格や心理的特性をTSMI(体協スポーツモチベーションインベントリー)や内田・クレペリン性格検査を用いて分析させて頂いた。そこで私は、駅伝の指導者としての野呂進先生の姿を目の当たりにすることになる。先生の指導法は、論理的で理詰め、指導に加えて、選手の個性や感性をととても大切にされており、選手達の眼はキラキラと輝き、伸び伸び練習していた。ここで陸上競技ができる選手は幸せ者だなと直感的に思った。「失敗を恐れるな!少々失敗しても取り戻せば良い!追い込む時は必死に追い込み!休む時は



しっかり休め！責任は俺がとる！思い切ってやれ！」など野呂語録の数々である。

スポーツの指導者や企業経営者のマインドは、パフォーマンスと高い相関がある。ミスを極端に恐れるリーダー(指導者や経営者)の元では、どんなに優秀な選手(部下)であっても「失敗回避の精神状態」に陥り、パフォーマンスは低下する。まさに今の専修大学の姿と一致する。「責任は私がとる！失敗を恐れず思い切ってやれ！」と言ってくれるリーダーが少なくなったのはとても残念なことである。

30年前のエピソードである。社会体育研究所の研究環境の劣悪さに業を煮やした入職間もない若造教員が、実験機材やトレーニング機器を勝手に購入した事があった。その後、管理課担当者からクレームがついたのはいうまでもないが、無鉄砲な部下が仕出かしたことは、管理する所長の責任だと宣言し、野呂社会体育研究所長から神対応していただいた事を思い出す。私の心がわし掴みにされたのはいうまでもないが、教員としてリーダーとして見習うべき感動的な出来事として、今でもしっかり脳裏に焼き付いている。

「津軽 情張り(じょっぱり)の源流」

スポーツ心理学者の長田一臣先生は、人の性格などは特別な心理テストなどやなくても、その人の生まれ育ち、眼つき、顔つき、言動、行動や態度(成功した時、失敗した時)をしっかりと観察すれば分かるものだと教えてくれた。

野呂先生は、七人兄弟の末っ子として弘前市で生まれ、石川小学校、石川中学校を経て「青い山脈」の作者、石坂洋次郎や冒険家の三浦雄一郎の母校でもある、弘前高等学校で学んだ。当初、数学の教師を目指して陸上競技



と勉学に勤しんでいたが、数学は抜群に出来たが、残念ながら英語の点数が不足していたことで、数学の教員になる事を諦めて体育教員へと進路変更したとの事。野呂先生の「物の見方・考え方・人生の生き方」は、故郷の青森県弘前で培われたと思う。駅伝の指導者として、社会体育研究所長(現スポーツ研究所)として、パフォーマンス(Performance function)とメンテナンス(Maintenance function)のバランスのとれた見事なリーダーシップは、弘前高校に脈々と流れる教育理念である「持って生まれたものを深く探って強く引き出す人」の影響を受けているように思う。時勢に流されず、媚びず、志を高く持って生きるという教育目標は、感受性豊かな若き日の野呂少年の心にしっかりと染み込んだはずだ。また、第22代小田桐孫一弘前高校校長が、理念の説明に引用した高村光太郎の詩「少年に与ふ」と「牛」は、野呂先生の姿と見事にオーバーラップする。

「少年に与ふ」高村光太郎

えらい人や名高い人になろうとは決してするな
持って生まれたものを探って
強く引き出す人になるんだ
天からうけたものを天にむくいる人になるんだ
それが自然と此の世の役に立つ

「牛」高村光太郎

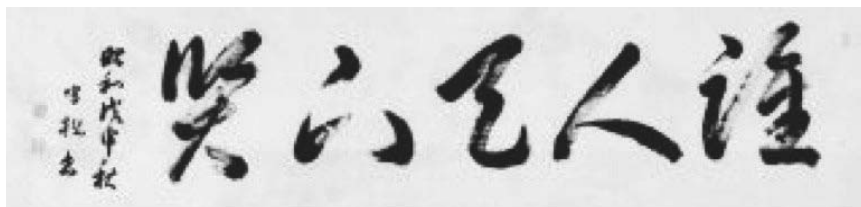
牛は急ぐ事をしない。
力いっぱい地面を頼っていく
自分を載せている自然の力を信じ切って行く
ひと足、ひと足、牛は自分の道を味はって行く
ふみ出す足は必然だ
うはの空の事ではない
是でも非でも
出さないでは堪らない足を出す牛だ
出したが最後牛は後へはかへらない
そしてやっぱり牛はのろのろ歩く
もうひとつ、弘前高校には「誰人天下賢」という大切な言葉があるという。
品格があり高い志と強い信念をもち、背骨のしっかりとした自己の確立や自己実現を目指す生徒の育成に努め、徳・智・体ともに調和のとれた人間形成を意味する言葉である。これも野呂進先生を象徴する言葉だと感じた。

野呂進の勝負哲学

野呂先生は、選手としても指導者としても、上手にパズルをはめ込むように、戦略・戦術とコンディショニングを駆使して選手の力を発揮させる能力に長けていた。スポーツジャーナリストの満園文博氏との対談の中で、本番で自分(選手)の持っている力を発揮する(させる)ための方法に関して以下のように語っている。

満園 現役時代どのようなレース作戦で勝負していましたか？

野呂 実際のレース中は自分の前を走る選手



もいて必ず主導権を握ってという展開ばかりではないですが、要はラストスパートを掛けるタイミングをどこに置かかが勝負だと述べています。自分はラストスパートが効かないので、最後の直線、ホームストレートで仕掛けたのでは絶対負けてしまう。だからレースの時は、常に残り1周の鐘がなる前には良いポジションに付けておくようにして、走りながら1200mの通過タイムを予測し、残り300mをどのくらいで走れば勝てるのかを計算する。ペースが早い展開であれば「いま行くべきだ」とバックストレッチから飛び出します。できればバックストレッチでトップに立ち、後ろが付いて来るようだったら、もう1回スパートする。二段構え、三段構えができなければ、僕は勝てない。だから、早めに仕掛けていたのです。

満菌 それで早めに揺さぶっていたのですね。出ると見せかけて相手のスタミナを削ぎ、スパートを効かなくなるようにするのですね。中距離の駆け引きは本当に凄まじいです。

野呂 僕にはラストスパートのスピードがなかった。優勝は少なかったけれど、いつも上位には入るタイプの選手でした。

満菌 優勝が少ないとはいえ日本選手権も、アジア大会もチャンピオンにもなりました。大一番で勝つところが非常に興味深いですね。

野呂 自分でもかなり勝負は強い方だと思っています。(笑)僕も大きな試合になるほど足は震えました。ところが、いざピストルが鳴っ

てしまうと、冷静にスッとレースに入れたものです。

満菌 それは若い頃からですか？ それともベテランになってからですか？

野呂 特に強くなってから、大きな試合に出るほどそういう傾向でした。ピストルが鳴るまでは足が震えるのですが、鳴ってしまえばレースに集中できました。

満菌 面白いですね。国内でトップクラスになってからの野呂先生は、例えば相撲の力士の番付が上がると、格下相手には「名前が勝負ができる」ということがあります。名前で圧倒し、土俵に上がる前に勝負が付いているということですが、野呂先生はそういう経験はなかったですか？

野呂 それどころか僕にはスピードがないから、まずは予選突破という課題がありました。遅いペースでレースが展開すれば、スピードのない僕は予選落ちしてしまうかもしれない。中距離では、800mの選手が1500mに出ることもありますからスピードのある選手がけっこう多い。

満菌 そうすると、やはり僕が見てきた野呂先生のレースは、じつは数学で走っていた。数学が競技に活かされていたのですね。

野呂 言われてみるとその通りですね。練習で例えば、1000mを10本走る時にしても、400m、800m、1000mと1本ずつ走ってリカバリーするという練習を繰り返しても、タイムは

頭に記憶していました。ほかの部員は後でマネジャーのところに立ち寄って行って記録を見ますが、僕は頭に入っているから練習が終わったらマネジャーのところには寄らずに帰宅し、そのまま練習日記を書くことができました。

満菌 頭の中でメモが出来上がっているからですね。

野呂先生の指導者としてのモットーは何ですか？

野呂 専大で僕はそれほど強い選手を育ててはきませんでしたが、卒業しても実業団で駅伝を走る選手が大勢います。卒業後の進路は自由ですが、僕が育てた学生には陸上競技の楽しさを知り、好きになって、卒業後も続けてほしいという思いがあります。兎に角、陸上競技での失敗や成功を糧としてその人なりの納得いく人生を創り上げて行ってくれる事を願っています。

「一期一会」

「一期一会」とは、「一生に一度の貴重な出会い」を表す言葉である。何かの本で読んだのだが、自分の人生に影響を与えるような人と出会う確率は、24億分の1だそうだ。私にとって野呂先生は24億分の1の確率で出会ったと人だと解釈している。野呂先生と私との年齢差は約10歳。時々、野呂先生の姿と10年後の自分の姿をオーバーラップさせていた。10年後、私も野呂先生のようにスマートな年の重ね方とキッチリ仕事を仕上げて定年退職を迎えられるように精進したい。

思い起こせば30年前、女子テニス部を創設し、もがき苦しんでいた時、野呂先生の助言によって救われ、全日本大学テニス王座決定戦で日本一になることが出来た。また、未熟者の私が専修大学スポーツ研究所長として6年間、個性豊かなスタッフと共に楽しくもエキサイティングな活動ができたのも、野呂先生の的確なアドバイスのお陰だと思っている。

想い出は尽きないが、最後に野呂先生との「一期一会」に心から感謝申し上げると共に、定年後も奥様・御家族共々健康に留意され、専修大学スポーツ研究所の活動を大きな心で見守って頂きたいお願い申し上げます。

